

たたかいの ルポルタージュ

NO. 16 2019.4



現代ルポルタージュ研究会

目次

目次／たたかいのルポルタージュ 第16号

《1部》 編集者として、家族として

・ 追悼 柳澤明朗さん

同行二人
どうきょうにん

～これから柳澤明朗さんと共に～

自らの「生」を生ききった父と母

◇柳澤明朗さんのアルバム

柳澤明朗さん ありがとうございました

われらの先輩・柳さんを偲んで

孫からのお礼

子どもたちに「平和を！」の人生

灯のころを大切に

時代をみるアンテナを大事に

西村一郎

柳澤史樹

藤村記一郎

石井次雄

柳澤清香

横田 静

平野好英

加茂和子

七

二〇

二八

三四

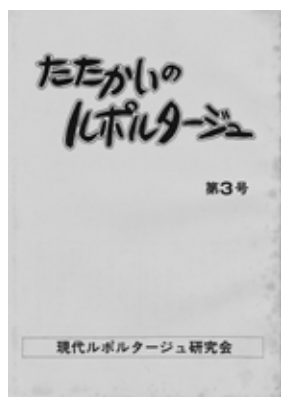
三六

三九

四三

四四

四六



柳^{やな}さんが書き残したメッセージ 飯島信吾 四八

◇柳澤明朗さんの主な編集・企画した出版物 五四

《2部》 いま・ここに——「ルポの力」

だれもが人として尊重され、人として生き、
人として働きたいⅡ非正規社員との歩みⅡ

相原幸雄 五九

被災地・南相馬で共に生きる

全身で演奏を楽しむ障がい者たち

西村一郎 七二

「住み慣れた地域で最期まで自分らしく」の試み

小川 緑 八七

書き残すことの大切さ

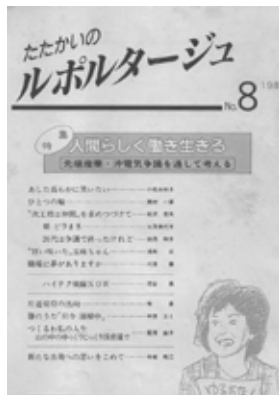
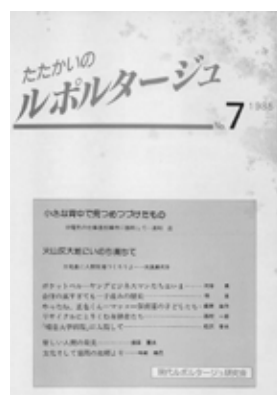
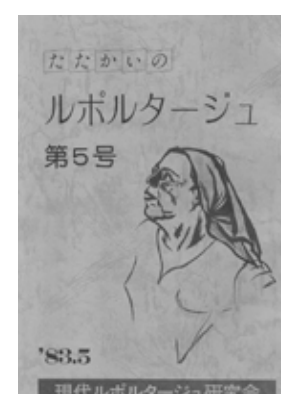
私とベトナム物語

小松みゆき 九八

「お墓にひなんします」

～続く原発関連自殺～

西村一郎 一〇九



《1部》 編集者として、家族として 追悼・柳澤明朗さん



(今崎暁巳さんを偲ぶ会にて、2011年6月4日)

同行二人^{どうぎようににん}

くこれからも柳澤明朗さんと共にく

西村 一郎

・はじめに

いつか柳澤明朗さんとの別れの日はくると覚悟していたが、突然の知らせに驚いた。私は小説を書いていた頃もあったが、何か物足りなさを感じていたときに、事実で語る力強いルポルタージュを知り、都内の中央労働学院で取材の方法や書き方などを学んだ。その卒業生で組織している現代ルポルタージュ研究会を、講師の今崎暁巳（1929～2010）さんから教わり参加させてもらった。その会で顧問をしていたのが柳澤さんで、私は35歳で1984年のことだった。

会の同人誌『たたかいのルポルタージュ』を発行しているときは、定期的に会合を持って作品の合評や顧問からの話などを聞いたりしていた。

「ルポは、○○を書くのではなく○○で書く」

「鐘は、強く打つことによって大きく響く。（取材相手に強く迫ること、大きな反応を得て内容がより豊かになる）」

「物事には表もあれば裏もある。両方を描いて立体的に表現する」

「抽象的な形容詞を使わず、具体的な事実の積み上げで本質を伝える」

どれもが書き手にとって大切な指針である。私はこれまで40冊近い単行本を書かせてもらい、その中に柳澤さんの教えをいくつも活かしてきたし、これからも続けるつもりである。

ルポ研の会合が終わると、10人近い仲間といつも飲みに行った。ビールやワインや焼酎など、それぞれが好きな飲み物を手にする。柳澤さんと私はいつも日本



柳澤明朗・節子夫妻

酒だったこともあり、飲むときは近くに座り話をする機会も多かった。

とにかく柳澤さんは熱血漢で、論理立てていつも熱く語ってくれた。それも堅い話の中にユーモアを交え、いつも楽しい時間であった。

2018年で69歳の私は、これまでに何人もの大切な人との別れがあった。辛い別れの最大は36歳だった実母とで、小学3年の9歳だった私の小さな心に、人はこの世から全くなりなくなることを深く刻んだ。

ところで私の故郷である土佐の高知では、四国八十八カ所巡りの白装束のお遍路さんときおり見かけた。小鈴を鳴らしながら読経しつつ玄関に立てば、子どもでも出ていって一握りの米を手渡していた。そうしたお遍路さんは、菅笠や杖に同行二人と書いてある。真言宗の開祖である弘法大師（空海 お大師さま）が側にいて、どんな困難なときも共に歩んでくれることを意味する。死者はやがて仏となり、現世に生きる人々を見守り励ましてくれる教えによる。

そうした仏教を信仰するかどうかは別にして、大切な人、大切な人を心の片隅に置き、支えにし暮らしている人は多い。一人ひとりの人間は弱い存在で、自分の力だけではどうしようもない苦しみや悲しみなどに直

面して困惑することは、長い人生で時々おこる。そうしたとき「自分は決して一人ではなく、大切な○○さんが傍にいて見守ってくれる」と考えれば、苦しみや悲しみを和らげ、試練に押しつぶされることなく心を強くして、故人と一緒に自分なりの人生を歩むことができる。私の実母ともそうで、20歳で南国土佐を後にして上京する時に持参した小さな位牌を、今でも書棚に飾り朝夕手を合わせている。私にとっては、お大師さまよりも母との同行二人である。

他にもいる。敗戦となった中国大陆で自らの片目をつぶし帰国した亡き父や、自らの人生で人間らしい生き方を見せてくれた恩師たちも、また別の同行二人となった。そうした支えがあつて私は一歩一歩進んできたし、これからは歩んでいくことができるだろう。何人かの同行二人がいる中へ、新たに柳澤明朗さんをぜひ加えたい。

1994年に柳澤さんから私は、出版してすぐの『若者いろの涙あふれて』だけれど主人公のぞうれっしやー（ふきのとう書房）の表紙の裏に、毛筆で「ともに未来を創る」と書いていただき、今も書棚に並べている。久しぶりに読み返し、柳澤さんの企画した品川駅から名古屋駅まで特別仕立ての「ぞうれっしや」に同乗したこ

とや、新宿の歌声喫茶「ともしび」にて柳澤さんをお迎えし、新居の仲間、合唱構成「ぞうれっしやがやってきた」（原作…小出隆司 作詞…清水則雄 作曲…藤村記一郎）を大きな声で歌ったことなどを思い出した。

第二次世界大戦のとき国内で動物園の猛獣を殺す命令が軍から出て実行し、象は名古屋の2頭を残し全て処分となった。戦争が終わり象をぜひ見たい東京の子どもたちを乗せた特別列車が、動物園を訪れるため市や国鉄などの協力で1949年に名古屋へと走った。そうした数々のドラマを11本もの歌詞と曲にし、児童と大人の男女混成の合唱の他にも、バリトンやソプラノのソロ、ナレーション、空襲警報や汽笛と汽車の走る音などで構成されている。

この「ぞうれっしやがやってきた」は、1986年に「愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団」が名古屋市で初演した後は、同年の日本のうたごえ祭典を経て全国へと流れ、さらにはタイ・韓国・中国にも広がり、今も各地で元気に歌われている。

柳澤さんは、ルポルタージュの書き方だけでなく、激動する社会に正面から向き合い、どのように人間として生きていくべきか何回も熱く語ってくれた。その情熱は、これからも私も忘れることは決してないだろ

う。もっと詳しく柳澤さんを知りたくて、手持ちのルポ研の資料などを整理し、あわせて妻の節子さん(85歳)を横浜に何度か訪ねた。

・母千枝さんに手を引かれ

千枝さんの教育

1910年(明治42年)生まれの千枝さんは、同じ群馬県出身の軍人柳澤信衛(のぶえ)さんと結婚し、2年目の1934年(昭和9年)1月に明朗さんを出産した。ところが同年の10月に、宮中を守る先鋭部隊である近衛三連隊の将校であった信衛さんは、品川駅前で車に跳ねられそうになった老人へ体当たりをして助けたが、本人は死亡してしまった。

残された24歳の千枝さんは、葬儀が終わると幼児の明朗さんを抱いて群馬県高崎市郊外の村にある実家へ戻り、再婚の話もあったが全て断わり、安月給の教師をしつつ母親と一緒に明朗さんを大切に育てた。

唯一の形見である一人息子を、世間からけっして笑われることのないようにと、千枝さんは厳しい子育てをした。明朗さんの話では、物心ついた頃から毎日のように、「お前の父は軍人の鏡だ。人を助ける事で自ら

を投げ出したそのお父さんを継げ。しかし、19歳以降は生きていると思うな。思ってはいけない。お前の命は、天皇陛下に捧げてあるから」と聞かされ、将校になるための猛勉強と躰を強いられていた。

大きな仏壇の前で明朗さんは毎日正座して勉強させられ、計算や漢字を間違えたりすると、太ももにあざができるほど千枝さんから強くつねられ顔をゆがめた。また母から「小説を読むと不良になる」と厳命された明朗さんは、学校の勉強一筋で過ごし、少年向けの小説などを読んで夢をふくらませることなく育ち、天皇へ命を差し出す超戦争少年となることに疑問を持たなかった。

それでも明朗さんは、こんなに厳しい千枝さんが本当の母親なのかと疑ってみたり、死んだ後の自分はいったいどこに行ってしまうのかと星空を見上げて思案したりするなど、口や態度にこそ出さなかったが母への反発を秘めていた。

戦後の社会変化は、千枝さんの考えにも影響し、1957年から58年にかけて教員への勤務評定反対の闘争では、教職員労働組合の一員として活動した。千枝さんは1966年から都内の柳澤家で一緒に暮らし、『子どもを戦争から守るために―私の戦争体験記―』(新

日本婦人の会渋谷支部、1993年)で、以下のよう
に戦前の自らの教育を後悔している。

「幾多の可能性を持った子ども達に、いつでも戦争に役立つような訓練をさせる当時の教育の在り方や政治に疑いも持たず、これに協力してきた自分を思う時に懺悔(ざんげ)堪えません。と同時に明治末期に生を受け、封建時代からずっと『知らしむべからず抛(よ)らしむべし』という日本のやり方に育成された自分を振り返る時、教育の力がいかに大きいものであるか、身に沁みて感じました」

その中で「どうれっしゃがやってきた」に出あった千枝さんは、教員時代に音楽を教えていたこともあり、明朗さんと一緒に舞台へ立つこともあった。歌の練習の合間には戦前の学校教育について、千枝さんの反省を子どもたちに語った。

人生を短歌で綴り

千枝さんは、『歌集 くわの実』などでたくさん短歌を残した。そこから明朗さんに関わるものを並べてみた。若くしての夫との死別や、戦争など激動する時代に翻ろうされつつも、母として一人息子をしっかりと守りながら、強く生き抜いてきた意気込みを感じるこ

とができる。明朗さんの年齢を付け足した。

お七夜 昭和9年1月 0歳

教うるにあらねど我児は乳首を 巧みに吸いて安らかに寝る

夫の不慮の死にありて 昭和9年10月 0歳

幼な児の父死に給うとも知らず 喪服の腕に安らげく寝る

肺炎にて吾児高輪病院に入院して 昭和10年3月 0歳

入院の子の枕辺に呆然と たたずむ吾に看護婦の声 退院2日目故郷に帰りて 昭和10年6月 0歳

こんなにもやせて母は早や涙 頬すりよせて孫とおしむ

夕立の日に 昭和11年12月 1歳

雷を嫌いて泣ける幼な児に 南無らいでんと祖母は祈りぬ

母と亡父の思い出を語りて 昭和12年9月 2歳

亡き父の世に在りませば如何ならんと 吾児を抱きて母と語りぬ

八幡小学校入学の日に 昭和15年4月 6歳
ハンカチを折目正しく胸に下げ ま深にかむる学帽

のいとし

勝田町艦砲射撃の日に（明朗小5年生、庭に掘った防空壕） 昭和19年 10歳

子の掘れる防空壕に身をひそめ 解除のブザひたすらに待つ

上信線に乗り旧制中学校へ通う子 昭和22年4月 13歳

上信一ぼろい服だと平然と 言いのける子の頼もしく育つ

ハンドボールの選手となりて 昭和22年4月 13歳

歳

四く五杯をまたたくひまに平らげて 子はたくましく少年となる

中央大学入学のみぎり 昭和28年4月 19歳

意気高き青年となりて論ずるも なお幼顔残る吾兄なり

入学当初あまりにも度々の送金に 昭和28年4月 19歳

今日もまた送金せよと言いかし 便りは後に弗入（どるいり）を見る吾

早稲田大学大学院入学 昭和32年4月 23歳

夢に見し大学院に学ぶ子の 恩師を語る輝けるひと

で分からなかった。中学では軍隊戻りの上級生たちに拳銃での度胸試しを受けながらも、ハンドボール部に入って汗を流し、国体での優勝をめざして明朗さんは訓練を重ねた。

息子を超戦争少年に育ててきた千枝さんは、戦後は司法試験に合格して社会人になるレールを敷き、明朗さんはそれに乗り替えた。上京した当初はあまり熱心に勉強せず、自由に寝坊のできる寮生活はガラガラと過ぎていった。

それでも1960年になる前からの日本では、学生運動や労働組合運動が激しくなり、安保反対の大きなうねりが明朗さんも呑み込み、社会を学ばずにはいられなくなって地域の小さな勉強会に参加し、やがて平和を愛する社会人へと成長していく。

激動する社会の中で、自らの意思を大切にして人生を歩んだ母千枝さんから、明朗さんが影響を受けたことは多い。

み

ラジオ東京テレビ結婚式をあげて 昭和33年10月 24歳

吾兄とわに妻な離しそ 吾が徹を踏みな給いそ斯（か）く母は祈る

大学院卒業式に参列して 昭和35年3月 26歳

蜚雪の功なり吾子は晴々と 卒業証書母の手におく本栖湖（もとすこ）にあそびて…幡ヶ谷子供教育を語る会などが主催の第3回親子キャンプ 昭和49年8月 40歳

団結のわと燃えさかるファイヤーに 笑いさざめく子の顔の映える

千枝さんは1995年に84歳で他界するまでの人生の多くは、夫を胸に秘め凜として生きてきた。そうした母と子の歩みにとって、大きな出来事の1つは第二次世界大戦で、親子が期待した神風は吹かずに日本は負けた。19歳になったら軍人として死んで、靖国神社に祀られるものと考えていた明朗さんは、それ以降も生きていかなくてはならなくなった。日本の敗戦理由が理解できず、あこがれの陸軍士官学校への夢は途絶え、これからどう生きていけば良いのかまる

・妻節子さんとの歩み

二人の赤い糸

明朗さんは1953年に中央大学法科へ入り、初めての都会生活がはじまる。群馬県出身の男性だけの寮である上毛学舎で社長との愛称の人気者となり、大学の講義は退屈だとさぼり自由な青春を楽しみ、20歳になっても司法試験に興味はなかった。そんなときである。近所の若い夫婦の勉強会が話題となり、美味しい物も食えると寮から何人かで押しかけた。小さな一軒家で丸いちゃぶ台を囲んでの会は、熱気あふれ学生たちを夢中にさせた。

戦争中に神風が吹くと国民は信じていたのに負けた原因が分からず、大人は誰もそのことについて語らないし、納得のいく説明を若者が受けていない時代であった。

他方で旧姓山田節子さんは、成人の日を記念して何か学ぶ場を探していた。たまたま馴染みの本屋で紹介を受けたのが同じ勉強会で、そこで2人は顔を合わせ、5年後には始まったばかりのテレビ結婚式をあげることになる。

65年前の思い出を節子さんは、微笑ながら語ってくれた。

「小さな家での勉強会は、昔からの友だち同士のよう
に和気あいあいとし、哲学や文学や政治など多岐にわ
たって、私にはレベルが高くて面白く、会のある金
曜日の夜が待ち遠しいものでした。また皆でキャン
プやサイクリングや歌声祭典にいくなど、それは青春を
謳歌したものです。」

当時は戦後日本の大きな変わり目となる60年安保の
前夜で、組合運動や学生運動も活発で誰もジツとして
いることのできない時代でした。このため明朗さんは、
はじめて自分の意思で労働法のゼミで学ぶと決め、早
稲田の大学院目指し勉強していました。

両親と子ども6人の大家族の山田家は、住宅難でも
あった戦後8年目にやっと家族揃っての生活ができて
いたので、私は高卒の資格ぐらい持ちたいと夜学へ通
うことにしました。妹となら夜道も大丈夫と考え、勤
めていたダイヤモンド社の帰りに通うことのできる港
区の都立三田高校を2人で選びました。明朗さんが、
受験のための家庭教師を喜んで引き受けてくれたもの
です。

私と妹は、勤めと授業が終わった安堵感で新宿駅ま

で帰ってくると、いつも明朗さんがベンチで本を読ん
で待っていていました。それが4年間も続いたのだ
す。3人で帰宅するまでの間が、楽しいおしゃべりタ
イムでした。家の玄関を開けると『お帰りなさい！』
と妹や弟たちが大声で迎えてくれ、上がった明朗さん
も一緒に遅い夕食をとりながら、大きな笑い声が部屋
中にいつも広がりました。それでも父や母は何も言わ
ず、しばらくたつと明朗さんはご機嫌で寮に帰ってい
きました」

こうして明朗さんの明るい人柄が、山田家の全員に
受け入れられていった。

父親と家庭への憧れ

明朗さんの関心の先はもちろん節子さんにあった
が、一家の大黒柱である父親と8人が、楽しく暮らす
家庭の雰囲気も大きかった。節子さんの話は続く。

「1899年（明治32年）生まれの私の父俊一は、大
手商社のエリートサラリーマンで、当時では珍しい海
外生活も長く出世街道を歩いてきました。ところが結
核を患い長く療養生活をしたこともあり、健康こそ宝
で何事も笑い飛ばす元気が一番大切だとの強い信念を
持っていました。そのため私たち子どもの気持ちは、

ろう。

いつも前向きでした。読書を忘れないようにと話し、
自らは本と自然が大好きで、どんなに生活がたいへん
なときでも弁当を作って家族のピクニックを楽しみ、
生きる喜びをみんなが味わっていました。それほど子
煩悩な父でした。

父親をまったく知らない明朗さんにとって私の父
は、まるで憧れの存在だったのではないでしょう

か」
療養所からの俊一さんの手紙は、幼い子どもも読む
ことができるようにと片仮名で書き、それも色鉛筆の
風景画を描き、紅葉を同封し「コノモミジノハツパ
ラヒロゲナガラ『モミジノハツパハキレイダナ』トウタ
ヒマシタ」とあって、節子さんは何度も読み返しては
涙を流した。そんな子煩悩の父親に明朗さんはきつと
驚き、ぜひこの人に信頼される人間になろうと心に決
め、自らの進路も定めたことだろう。

晩年明朗さんは、節子さんへ次のように語った。

「早稲田の大学院で、労働法の権威である野村平爾先
生と沼田稲次郎先生にしごかれ、またゼミの友人たち
にも恵まれて本当に良かったよ。山田の親父さんにも
な。こうした出会いがなかったら、俺はダメな人間に
なっていたらなあ。みんなに感謝しているよ」

長い人生を振り返った明朗さんの実感だったことだ

山田家の家庭についても、明朗さんの驚きや憧れは
同じであった。長女の節子さんの下に3人の妹と2人
の弟がいて、それは仲の良い家族だったことは、一人
っ子の明朗さんにとって信じられないほど魅力的で、
学校から帰ってきて明朗さんを交えた笑いとおしゃべ
りは、双方にとって大切な時間になっていた。

こうして明朗さんと節子さんは、やがて人生を共に
して歩む気持ちをそれぞれが固めていく。

明朗さんは、節子さんの2歳下の妹百合子さんとの
接点も多かった。1960年に中央合唱団の研究生と
なって歌声運動へ飛び込み、激しいストライキ中の三
池争議にまで駆けつけ、家族を心配させたこともある
百合子さんが、明朗さんについて話してくれた。

「兄からの熱心な誘いで私は労働旬報社で働き、兄が
本づくりに夢中だった時代を共に過ごし、70代になる
まで同じ合唱団と一緒に歌い続けることができました。

兄に教えてもらったフランスの詩人ルイ・アラゴン
の、『教えとは希望を人に語ること、学ぶとは誠を胸に
刻むこと』を使い、三田高校の弁論大会で賞をもらう
ことができたのは、青春時代の素敵な思い出の1つで
す。この言葉を私は心に刻み、今も大切にしています」

明朗さんと百合子さんは、反核や平和を心こめて歌う「合唱団この灯」で、何回も同じ舞台に立ち音楽によるメッセージをいつも発信してきた。

家族をつないだ「ぞうれっしゃがやってきた」

百合子さんから節子さんは、「ぞうれっしゃがやってきた」の素晴らしさを聞き、すぐに明朗さんへ伝えた。1987年のことで、この歌に魅了された夫妻からやがて息子や母へ、そして孫へと歌声の輪が広がっていった。

『戦後50年を生きて』（金沢健康で豊かな老後を考える会、1995年）において、節子さんは「驚きの星、地球に生まれて」と題して、以下のように家族と合唱との関係に触れている。

「合唱曲に出会ったことは、私たち一家にとって画期的なできごとである。この生命と平和への讃歌は、なぜこんなにも人々の心を捕え、燃え広がっていくのだろうか？この曲を聞いた人も歌った人も、力いっぱい歌う子どもたちの輝きにまず驚くのだ。お母さんやお父さんもしょの温かいステージに涙し、大きな拍手を送らずにいられない。そして平和こそ幸せの基本であることを信じ、未来や人間を信じる。自分も参加

析している。

家族で歌った「ぞうれっしゃがやってきた」

「ぞうれっしゃがやってきた」の5番目の曲「動物を殺せ」で、動物をわが子のように愛する園長の嘆願を振り切り、カーキ色の服を着た軍人が、動物をすぐ処分せよと目を吊り上げ大声で迫る。ブーツの足でドンと床を強く打ちつけ、高圧的に軍人が振る舞うことによって、何の罪もない動物たちを殺す理不尽さと、優しい園長の悲しみをより浮かび上がってくれる。

1989年の軍人役で舞台に立ったのは、柳澤明朗さんの三男の史樹（ふみき、50歳）さんで当時21歳だった。その前に数回合唱していたこともあり、両親からの頼みの軍人役をりっぱに演じた。

大人の混声合唱では、女性のソプラノとアルトや、男性のテノールとバスにそれぞれ分かれて歌う。明朗さんがバスで母親の千枝さんがアルトで参加し、何回も練習してきた仲間たちといっしょに大きく口を開けた。前座で腹話術を務めた節子さんも、着替えて舞台に戻りソプラノで歌っていた。

子どもたちの元気な声もこの曲には欠かせない。「サーカスだ」の子どもたちの大声で歌は始まり、11曲目

して生きていきたいと思う」

舞台で歌がスタートする前に節子さんは、腹話術で可愛いキララちゃんを使って場を盛り上げた。

「みなさん、こんにちば。お星さまの国からやってきたキララです」

「お星さまの国でね、象のマカニールやエルドが戦争のとき、芸をしたのにどうして餌をもらえなかったのかなあ、悲しかったなあって話してましたよ」

節子さんが、横に抱いた大きな人形のキララちゃんを使って腹話術で話していた。愛らしいキララが、大きく口を開けて話をするので、子どもたちはビックリして見ていた。舞台に並んだ大勢の老若男女の合唱団員も、キララの話で少しリラックスし歌う準備をすることができた。

なお節子さんが、腹話術の人形にキララと名付けたのは、広島の被爆者であった名越操（なごや みさお 1929-1986）さんが、わずか7歳で亡くした息子の史樹（ふみき）君を綴った詩「あの星はぼくあの星はお母ちゃん」からとっている。

節子さんから歌を紹介してもらった明朗さんは、『若者いろの涙あふれて』において、自から、ぞうれっしゃの場にとびだしてゆくのだと思うのです」と自己分

は「わーいー」の大歓声で終わる。ある舞台では、明朗さんの孫である幼い清香（さやか）ちゃんと陽香（はるか）ちゃんが、児童合唱の仲間と一緒に元気の歌声を会場に響かせたこともある。

幼児から高齢者までが同じ舞台で歌うことが、「ぞうれっしゃがやってきた」の大きな魅力の1つで、親子で歌うのは珍しいことではない。それでも時期は異なるにせよ、柳澤家では実に4世代が歌っており、いかに家族で楽しんでいたか分かる。

「ぞうおじさん」とも呼ばれていた柳澤明朗さんは、自著において「ぞう運動の魅力は、（略）人間のもつ輝きが乱反射する磁場」と紹介した。

また『たかひのルポルタージュ12号』（現代ルポルタージュ研究会、1997年）では、「ぞうれっしゃがやってきたの」曲はいのちや平和の大切さを歌う。希望と夢にあふれ親子で一緒に歌える人間賛歌だ。こうした出会いや練習過程をく人間の輝きが乱反射する磁場と呼んでいる。発見と創造がある」と書いた。

人間のもつ輝きが乱反射したのは、柳澤家と山田家のそれぞれも同じであった。柳澤千枝さんの口ぐせは「終わり良ければ全て良し」であり、その言葉通りに有終の美を飾った。山田俊一さんによる12巻もの家庭

日記の最後のページには、「大変に楽しかった。妻を中心に、みんな和気あいあいとし、心から楽しむことの出来ることは、全くわが家の誇りであり、嬉しい限りである」と達筆の万年筆で記していた。

・おわりに

【私の残日録】

「私の残日録」と題する長文のメモに沿って明朗さんは、1995年に現代ルポ研の場で自らを語ってくれた。その中の一文が以下である。なお残日録とは、藤沢周平の小説『三屋清左衛門残日録』（1989年、文藝春秋）に依るもので、隠居して暮らす清左衛門が、若かりし頃に良かれと考えてした事を反省し、これで良かったのかと深く悩む物語である。

「私もまた、情熱と誠実で突き当れば何事も実現した。少なくともそう信じられるほどにやりたいことができた。われこそ正義を体現しているとの確信で、当たるを幸いの態で、主観的真相を真正面から記録しつづけた。走りに行った。実に身にあまる愛されかたを大勢から受けたことがそれを可能にした。そして今、清左衛門の如くに苦悶する。

昏ルルニ未ダ遠シ」からで、人生が終わるにはまだ日があるから、もう少し自分なりの役割りを果たしたいとの願いを込めている。老後を心配してくれる息子の嫁に、清左衛門は言葉の意味を、「残る日を数えようというわけではない。いろいろとやることが出てきた、けっこうわしいもいそがしくなりそうだ」と話した。

そして最後の場面である。中風で歩行の出来なかつた元同僚が、苦勞して歩く習練姿を見た清左衛門は強く感じた。

「衰えて死が訪れるその時は、おのれをそれまで生かしたすべてのものに感謝をささげて生を終えればよい。しかしよいよ死ぬるそのときまでは、人間は与えられた命をいとおしみ、力を尽くしていきぬかねばならぬ、そのことを平八に教えてもらった」

藤沢周平が高齢者の生き方として、清左衛門を通して一番伝えたかったメッセージであった。この生きざまは、武士の時代だけでなく今日にも十分通じる。明朗さんもこの言葉に強く共感し、自らの人生に重ねたことだろう。もうすぐ70歳となる私にとっても、この言葉はズッシリと響く。

最後に過ごしたグループホームで明朗さんは、認知症に負けずよく語りそして書いた。その1つの色紙で

かなりの人生の期間、正義も理想も一つですんでいたのだが、やがて一つの思想や事実が通用する時間や年月が、とても短くなってきたことを感じていた。何をどう記録していくのか。結果よりも参加して創造していく過程そのものに価値をおき、その過程に生じる人間関係や、生活そのものに価値を見出していく哲学だ」

労働旬報（現旬報）社の編集長や社長として、労働争議や教育などに関する貴重な本を多数出版し、その中には映画やテレビになったものがいくつもある。それにも関わらず明朗さんは、1994年に退職してわずか1年後にこうした苦悶を発露している。

その苦悶に対して納得する回答を、他界するまで明朗さんは見付けることができなかった。いや、そもそも回答などは存在せず、苦悶することにこそ人間としての価値があるのだろう。「結果よりも参加して創造していく過程そのものに価値を」と強調した明朗さんの言葉は、人生の結果よりも生き方そのものを大切にしている。

日残りテ昏（ク）昏ルルニ未ダ遠シ

三屋清左衛門の言葉は、中国の書にある「日残りテ

ある。

「心を全開にして語りあえる友と出会いたい。それぞれの人と人のむすびつき、つながりを伝えあい、にんげんの輪が一気にひ（ろ）がっていくときをつくつていきませんか。ごいっしょに。そんな夢をみたい。」

一字「ろ」は抜けているが、文面は実にしっかりしている。なお「ごいっしょに」とは、旧ちばコープにおけるキーワードの1つで、人間らしい助け合いの合言葉でもあった。

そして最後の筆となった。

「さあ！みんな楽しい老後をつくろうよ！」

たとえ病が進んでも、どこまでもユーモアをもち前向きで熱い明朗さんであった。

人間としての明朗さんへより迫ることによって、これまで以上に親近感をもつことができた。苦悶しつつも明るく最期まで生き抜いた柳澤明朗さんと、私はこれからも同行二人していきたい。

（現代ルポタージュ研究会会員）

自らの「生」を生ききった父と母

柳澤 史樹

《1部》 編集者として、家族として・追悼 柳澤明朗さん

はじめに

2018年4月5日、父・明朗が胆管がんで亡くなりました。

享年84歳。10年ちかく前から認知症を患いながらも、5年間のグループホーム生活では、ほとんど直前まで幸せに過ごした末の静かな旅立ちでした。

父の死をきっかけに、ルポルタージュ研究会（ルポ研）の西村さんはじめみなさんと私のご縁ができ、今回家族を代表して私が寄稿させていただけることになり、準備を進めていました。

しかし年が明けて2019年の1月18日、今度は母

の節子が入院していた病院で突然倒れ、帰らぬ人となりました。

入院は昨年末に手首を骨折したためでしたが、手術も無事に終わり、2月の退院にむけてリハビリに励んでいた矢先のできごとでした。

享年85歳、死因は大動脈瘤破裂による一瞬のできごとで、駆けつけたときにはすでに母は旅立っていました。

脚以外は本当に元気だった母と、前日までメッセーJのやりとりをしていた私たち家族にとって、まさに青天の霹靂でした。

西村さんは父の死後、母のものを何度か訪ね、彼の軌跡を取材してくれており、今回は母も寄稿するはずでしたが、かなわぬことになってしまいました。

そこで今回は両親の生き様を思いつくまま書かせていただくことにしました。

この1年のあいだに立て続けに起きた両親との別れは、今年50になった私にとって、本当に象徴的な区切りとなりました。長くなりますがご覧いただければ幸いです。

父明朗のこと

「お前は器用でなんでもできるが、続かないのが弱点だ」

悔しいけれど見抜かれていると思わざるを得なかった父のこの一言を、今でも覚えています。

編集者として労働旬報社で幾多のヒット作を世に送り出し、定年後も変わらないペースでさまざまな活動をしていた父と私は「腕のいい、しかし意地の悪い編集者と、その編集者を尊敬しながらも人生経験がなく、拗ねて反発しているだけのライター」のような関係でした。

私が生まれた1968年、広島の被爆教師を取材し

た『未来を語り続けて』に携わっていた父は、私が生まれる半年前に被爆二世で死んだ「名越史樹ちゃん」の名を母や祖母と長く深い協議のすえ私につけました。

しかし私は、両親を尊敬しながらもその名前の重さから逃げていました。

いろいろな仕事や趣味にチャレンジしながらも、自らの生を生きている実感を感じることができず、長いあいだ迷走していたのです。

その頃の私を評したこの一言は、まさに言い得て妙だったと今にしています。

とはいえ家族が揃う夕食のときには、全員で互いの考えや思いをとにかく議論し共有していましたし、半ば両親の情熱をかけた取り組みを、冗談交じりに私たち子どもや孫たちが茶化して笑う、そんな時間はとても多かったのです。

また、私がやることについて、父から小言や文句をいわれた記憶はほとんどありませんでした。

三人兄弟の末っ子である私に対し、父は兄ふたりの子育てを通じて「人間とは子供であっても独立した人格で思い通りにはならない生き物だ」と学んだのかも

自らの「生」を生ききった父と母

しれませんし、個としての私を尊重してくれていたのだと思います。

父がこうした批評を他の人にもしていたことが、生前お世話になった方々の話で判明しました。

お酒を飲んで酔っぱらいながら、大きな声で冗談や大げさなことをいい、みんなを笑わせるのが大好き。

そうした楽しい空気の中で、突然相手に皮肉っぽく意地悪な批評を入れる父のスタイルを、私は正直なところあまり好きではありませんでした。

しかし彼は同時に自らにもハッパをかけ、新しいチャレンジを繰り返していたのだと感じます。

定年後「ぞうれっしゃ」や「この灯を永遠に」といった合唱に注力していったのも、自身が活字の限界を感じていたところに訪れた、新たなチャレンジだったのでしょう。

そんな父は、認知症を患いホームに入ってから、見舞いに行く仕事や政治、教育の話ばかりしていました。

細かくいえば辻褄の合わない話がほとんどなのです

顔で迎えないでくれ」とただ願っていました。

しかし悲しみや恐怖と同時に「この瞬間を自分の自伝史のページとして取材していて おくのだ。父が最後の教えを伝えようとしてくれているんだから。」と冷静に受け止めようとしている自分もいました。

夜中の2時半ごろ、別の病院に入院していた母の声を携帯電話で聞いた途端、父の呼吸が穏やかに。

約60年の結婚生活をともにした伴侶の声が、彼を安心させたのでしょうか。

その後すぐに彼は眠りに落ちるように静かに目を閉じ、呼吸を止めました。

まるで次の世界へ行くことを自分で決断したような旅立ち。

少なくとも私にはそう見えました。

この経験を通じて、私は、「自分の命は自分の意思で仕舞えるのだ」という、大きな教えを得ました。

たくさんさんの信頼できる友人と、自らの使命に対して誠実に、夢中で取り組み、一生を駆け抜けた父は、本当に幸せだったと思います。

が、ときにこちらがハッとするような本質的なことを口にして「本当はボケてないんじゃないか」と母や兄と笑ったことも幾度となくあります。

ホームでは元気だったころと同じようなムードメーカー。スタッフの方にも慕われ、ほとんど家ではやらなかった炊事当番などを笑顔でこなしていた写真を見直し、彼は自分の人生に心から満足していたのだと思っています。

しかしそんな彼にも最期のときが訪れました。

胆管がんが見つかり、他臓器にも転移しつつ大きくなっていると聞いたのは死の1年前。

父は元気だったころ、すでに母と延命措置をしないことを決めており、ギリギリまで薬の手術もしないことにしました。

医師からは誕生日である2018年の1月1日も越えられないかもしれないと聞いていたのですが、その予想から三ヶ月も長く生きた末の4月5日の夜でした。

その夜、私はベッドの脇にいて、大きく苦しうに息をする父の額に手をあてながら「その瞬間を苦しう

また奇しくも父と同じように言葉を扱う仕事をしていることで、その死をきっかけにできた新しいご縁は、彼が遺してくれたギフトの一つだと思っています。

母 節子のこと

晩年を認知症で過ごした父とは違い、母は脚が不自由だったとはいえ、死の前日まで元気そのものでした。

そんな状況での鮮やか過ぎる旅立ちに本当に驚きましたが、さらに翌日は父と母が後年生涯をかけて取り組んだ「ぞうれっしゃ」が、うたごえ祭典70周年記念で披露される演奏の日。

「残された人が先に逝った伴侶を追いかけることがある」とはよく聞きますが、今回は間違いなく、寂しがりやの父がどうしても母と一緒に「ぞうれっしゃ」を聴きたいあまりに呼びにきたんだねと、家族で笑いました。

亡くなってから1ヶ月が経とうとしているいま、明るい彼女らしいあっぱれな最期だったと感じています。

長女として5人の弟妹がいた母は、苦勞して高校の夜学に通うなか、社会問題を考える勉強会で父と出会

ったそうです。父の猛烈なアタックの末結ばれた二人は、力を併せ、その生涯を通じて家族との関係をなにより大事に築き続けてきました。

東京で生まれた私の物心がついたころから、次妹である江森一家は近所に住んでおり、横浜に引っ越してから隣同士に。

二世帯住宅のように入り口が2つあり、家の中はドア1枚で繋がるという家で、叔父一家が引っ越すまで家族として15年以上、同じ屋根の下で暮らしました。

そのあいだにも長姉の特権を最大限に行使し、弟妹たちをたびたび召集。

誰かの誕生日や正月など、数えきれないほどの食事とともにして、そのなかで私たちは育ってきたのです。

そうして形成された、叔父や叔母、子供である従兄弟たちが全員が仲のよい家族のような関係が、彼女の遺してくれた最大のギフトだと思っています。

やんちゃな男三兄弟を育てあげた晩年の母は、左右の大腿骨をあいついで骨折、特に父を亡くしてからは、歩行器の生活で自宅にいなければならなくなりました。そんななか、妻の円（まどか）が作る食事がなによ

りも嬉しかったようで、いつも「お店みたいね」と大喜び。近況報告しながら、それまでと同じように、いろいろなことに意見を出しあい、よく食べ、よく笑いました。

一人で外出すらできないのに、常に明るく凛としている母のところには、いつも親戚や仲のいい友人が訪れていました。

特別な贅沢は最期までしてあげられませんでしたし、こんなに急に旅立ってしまうなら、もっと話しておけばよかったし、もっと優しくすればよかった。

そんな「たられば」は思い出せばキリがないのですが、共に過ごしたこの時間は親孝行と呼んでいい、そう思っています。

旅立った両親へ贈る言葉

両親は私が12歳になった年の8月、名越史樹ちゃんのお母さんに会いに広島へ私を連れて行きました。

母が「私たちが敗戦を迎えた12歳に史樹がなつたら、その名前の意味を体感してほしくて、広島に行こうと決めていたの。」と後日教えてくれたように、私だけでなく両親にとっても特別な広島行きでした。

する「なぜ？」を深く刻み続けていました。

それは両親が12歳のとき敗戦で感じた、国民にウソをつき続け戦争をはじめた大人たちへの限りない「なぜ？」と同じ性質のものだったのではないかと思えます。

私が長い迷走ののち、その「なぜ？」に向き合うことを決めたのは、2011年の東日本大震災、福島原発事故でした。

私はあの日をきっかけに自らのカルマに向き合うことを決めたのです。

その日から私の人生は、予想していた以上に大きく変わり始めました。

SNSで自らの名前について語り、地元の横浜で仲間達を集め、原発反対や、民主主義を学ぶためのイベントを企画運営するようになりました。

自分の中に長い間溜まっていたマグマが噴火したかのように、私は夢中になって核のもつ恐ろしさ、悲しさ、命の素晴らしさを、無関心な世の中に叩きつけるようになったのです。

史樹ちゃんのお母さんは初めて会う私をみるなり「大きくなって…」と涙ぐみ、その涙に大きな衝撃を受けました。

私は仏壇の史樹ちゃんに手をあわせて祈りながら「どうしてこんなにかわいそうな人たちがいるんだろう？」というやりきれない思いを強く感じました。

しかし私は成長していくなかで、そのときの体験を受け止めきれず、自分の名前に向き合うことから逃げるようになりました。

両親を尊敬しながらも、長いあいだ迷走を続けていた私は、彼らがその生涯をかけて取り組んでいたさまざまな活動を「貧乏くじ」のようだと思っていたのです。

人のためにばかり時間とお金を費やし、変わらない世の中に声を上げ続け、いったい何の得があるんだ？ それをもし引き継いだら、私はどうやって生きていけばいいんだ？ という思いを拭えなかったのです。

しかし、史樹ちゃんのお母さんに会ったときの経験にくわえ、両親の生きざまは、私の中に、世の中に対

そうして動き始めると、たくさんの新しい仲間、同じような未来を標榜する仲間たちが集まってきてくれました。

その繋がりには、これからさらに大きく発展しつづけます。

そうした拡がりを晩年の両親に少しでも見せられてよかったと心から思っています。

また、両親が人生をかけて運動に取り組んでいた理由は、使命感だけではなく、同じ思いをもつ仲間たちとの時間が本当に充実していて楽しかったからだ、と今にして分かるようになりました。

とりとめもない話しが長くなっていました。

そろそろ終わりにしなければなりません、両親に對して、どんな手向けの言葉を送ろうかと考えていたら、頭に浮んできたシーンがあります。

それは、父の書いたものに対して、母が評論をしているシーンです。

プロの編集者だった父ですが、母の読者として客観的かつ厳しい視点に絶対的な信頼をおいていました。

ともに成熟した個として、互いに尊重し学び生きて

いく夫婦のあり方こそ、本当の意味での幸せだと私は無意識に学んできたのだと思います。

妻は、そんな私の生い立ちから変容までのすべてを受け入れてくれ、共に生きていくことを決めてくれました。

父と母を尊敬し、同じようなあり方を望む女性が嫁いでくれたことを、彼らは本当に喜んでいました。

そんな両親をイメージさせる詩があることを、父が亡くなった時に知りました。

「学ぶとは希望を語ること 教えるとは誠実を胸に刻むこと」

これは母が一足先に旅立った父への弔辞に送った詩です。

フランスの詩人ルイ・アラゴンが作ったこの詩に、出会ったころから力を併せて学びあい、教えあい、精一杯幸せに生ききった彼らの姿が浮かんでくるのです。

私と妻がそのあり方を実践し、両親のように精一杯幸せに生ききること。

ここまで書いてきて、その宣言こそが彼らへの最高

の親孝行だと思に至りました。

みなさん、ここまで読んでいただき本当にありがとうございます。

最後に、彼らへの手向けの言葉を贈り、この拙い文章を終わりにしたいと思います。

明朗。パパ、節子ママへ

そちらはどうですか。おそらく二人で水入らず、快適に過ごしていることでしょう。

ママはこのあいだ清香の夢に出てきて「脚が良くなつて山登りに行くのよ」って伝えてくれたんだってね。

死に目に会えなかったし、とても驚いたけど、それを聞いて本当に安心したよ。

私と円は、二人が教えてくれた命のあり方を、同じ思いを持つた皆さんの仲間たちと引き継ぎ、幸せに生ききってみせます。

だから心配せず、二人もそちらで魂を高めあってくださいね。

再び会う日まで、しばしのお別れです。これまで本当にありがとう。またね。

(三男)



労働旬報社に「入社」(1961年)。撮影：1971年。

活発な編集者人生とルポ研での出会い



現代ルポルタージュ研究会

▽写真提供…柳澤史樹



若き日の「明朗・節子」



学生時代からのあだ名が「社長」



テレビ結婚式——1958年(昭和33年)(25歳)



家族とともに



2006年、石垣島への家族旅行



福岡県八女市星野村の山本達夫氏との運命の出会い。「アメリカを焼き尽くす敵討ちの火」としてずっと残してきた山本さんの原爆の残り火を、山本さんを朝日新聞の取材で知った明朗が上野東照宮にその火を移すプロジェクトに尽力。



合唱組曲「この火を永遠に」、「そうれっしや」へ

合唱組曲「この火を永遠に」を歌う（最前列右から3人目）



下町人間の会



「みんなでガンバロー」と書き残して……



「つくしの家」での幸せな暮らし



▽2018年7月8日の「柳澤明朗さんを偲ぶ会」のスピーチより。

柳澤明朗さん ありがとうございます

藤村 記一郎
(作曲家)

私と柳澤さんをつないでくれたのは「ぞうれっしゃがやってきた」です。

「ぞうれっしゃがやってきた」は、小出隆司さんの全国教育研究集会での発言や、1976年絵本自費出版版、歴史教育者協議会を中心とする全国の先生方の教育実践、1986年愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団による合唱曲初演、1986年愛知での日本のうたごえ祭典大音楽会での1000人大合唱などを経て、日本中に広がっていきました。

そしてついに1986年5月、当時労働旬報社社長の柳澤明朗さんより、「ぞうれっしゃがやってきた」の実践をもとにした本を、作者3人（原作・小出隆司、作詞・清水則雄、作曲・藤村記一郎）で書かないか、というオファーが来たのです。労働旬報社といえ、『どぶ川学級』『友よ未来をうたえ』日本フィルファア

モニール物語』『教育は死なず』『若木は嵐に育つ』・・・ほか、多数の教育・保育・平和・労働の様々な分野のドキュメンタリーが我が家にもあり、教育運動やうたごえ運動をすすめるうえでの愛読書でした。

その出版社から、本を書いてほしいと言われることは考えもしなかったことで、名譽なことではありましたが、まず初めに「私などには書けない」と思ったことが本音でした。小学校以来、作文が大の苦手で、原稿用紙1枚をどう埋めるか、毎年の読書感想文で懲っていましたので、本の原稿なんてとんでもないことでした。

しかし、柳澤さんは、そんな私の思いを見透かしたように、なぜ今「ぞうれっしゃ」なのかを熱く語る分厚い封筒の催促の手紙を、次から次へと送ってきました。とうとう根負けして、半年間関わる合唱団の練習

など一切お休みさせていただき、原稿書きに集中しました。そして1989年11月、『ぞうれっしゃよ走れ』みんなの胸から胸へ』が完成し、生まれて初めて私は著者となりました。

柳澤さんは、感じたことをやはりご自身で書くと思われて、旬報社社長を辞められた1994年、『若者の涙あふれて』だれもが主人公のぞうれっしゃ（ふきのとう書房）を出版されました。そのお知らせの柳澤さんの言葉は、私たちにぞうれっしゃの本を書けと、言い続けたことと同じ数々でした。特に、「ぞう運動」「ぞう病」「ぞうれっしゃ」を歌わない奴は人間じゃない」というユニークな言葉を使われたのは、柳澤さんの功績です。

以下、柳澤語録のごく一部です。

「人と人との出会いと絆の輝きが乱反射し、響きあって創る日常の場面」

「ぞう病」と呼んでいる伝染病・伝染病だから年齢も性別も思想信条も社会的地位や職業もこえてかかっていく、とりわけ親子一緒の場合が多い・重症であればあるほど、異口同音に「私たちこそ日本一だ」というのですから始末におえない」

「二人ひとりが個を、人間の尊厳をととても大事な価値

として根っこに据え・..それを楽しくって明るくって、ワクワクイキイキとやっている、草の根運動とはこういうもの」

最後に柳澤さんの著書にサインしていただいた言葉を記して、私の感謝の気持ちにします。

「ともに未来を創るすべての人々の愛と希望をひきだした曲に心からの乾杯！」

ほんとうにありがとうございました。

柳澤明朗さん ありがとうございます

《1部》 編集者として、家族として・追悼 柳澤明朗さん

われらの先輩・柳さんを偲んで

石井 次雄

(元旬報社社長)

《1部》 編集者として、家族として・追悼 柳澤明朗さん

本日は、かくも多くの皆様にご参会いただき誠に有難うございます。呼び掛け人の一人として御礼申し上げます。また、初井先生をはじめ木村先生、佐々木先生、村山先生から温かいメッセージをお寄せいただき感謝致します。柳澤さんと実に親密な関係であったという初井先生のメッセージを読みながら、初井先生同様親密な関係にあった今は亡き法政大学の青木宗也先生、早稲田大学の中山和久先生方と仕事の傍ら、一緒にゴルフをした楽しかった日々の事など、柳澤さんとの懐かしい思い出が蘇ってまいりました。

この柳澤さんについて、まず、思い出されるのは、入社して仕事を一緒にするにあたって発せられた叱咤激励ともいえる言葉でした。それは、〃階段は二段ずつ上れ、キャラメルは二個はおばれ〃というものでした。あの時のキャラメルの味は今では思い出せません。

れた先生は、この矜持をもって仕事に没頭する社風は、まさに〃運動のなかの出版社〃であると賞賛されました。この時代の柳澤さんの代表作は、なんとといっても『どぶ川学級』だと思っています。この『どぶ川学級』がいかに社会に受け入れられていたかについての記事を紹介したいと思います。

今から二〇年前、現在の旬報社へと社名を変更しようとしていたところ、朝日新聞の論説委員が訪ねてくれました。数多くある社名変更のなかで、なぜ、当社をえらんだのですかと尋ねたところ、『どぶ川学級』という魅力あるタイトルに曳かれて読み、大変心打たれたからだといわれました。そして、「天声人語」に次のように書いてくださいました。

パチパチと音をたて溶接の火花が飛ぶ。旋盤がうなりを上げる。

汗にまみれた「労働」の力強さを感じされる町工場がめっきり減った。

活気があったのは三十年も昔の高度成長のころだろう。

『どぶ川学級』（須長茂夫著）という本を読んで往時を思い起こした。

が、ともかく、柳澤さんは前へ前へと突き進み、まさに〃翔ぶが如く〃時代を駆け抜けて逝かれました。

本日、柳澤さんを語るのにいただいた時間は三分です。どの時代を切り取っても光り輝いていた柳澤さんをいかに三分で語るか大変悩みましたが、そこで柳澤さんの原点ともいえるべき〃労働者とともに〃運動とともに〃に絞って、語ってみたいと思います。

一九六一年に早稲田大学大学院の恩師である野村平爾先生の招きで、新生なった労働旬報社にエースとして迎えられた柳澤さんは、「労働法律旬報」の雑誌を編集するかたわら、大学院の恩師でもある沼田稲次郎先生の『運動のなかの労働法』を編集担当されました。この時の柳澤さんから精鋭社員の透徹した使命観をもって生き生きと全力投球をしていることに魅力を感じら

一九六〇年代のこと。東東京の機械工場で労働争議が起きた。

闘争に明け暮れる組合員の家庭の子どものため、労組が放課後に勉強を教えることになった。その場が「どぶ川学級」。

教える労働者と学ぶ子どもの間に共有された心の熱さが読む者に伝わる。

自主制作で映画化され、全国で上映された。地域に根を下ろし、教育にまで手を広げる力と心意気がそのころの労働運動にはあった。

柳澤さんは、このように多くの感動を呼んだ本をたくさん世に送り出しました。ベストセラーとなった『教育は死なず』（若林繁太著）を読んで感動したという脚本家の小山内美江子先生は、これを「父母の誤算」としてテレビドラマ化し、大きな反響を呼びました。

こうした多くの人びとに感動をもたらしした柳澤さん、著者と実に親密な関係で結ばれていた柳澤さん、透徹した使命感に満ちた柳澤さん、階段は二段ずつ上れと叱咤激励してくれた柳澤さん、この柳澤さんの魂の根源はどこにあるのだろうか、と思いつめぐらしてしました。

先日、かつての同僚の飯島信吾氏のブログをみておりましたら、柳澤さんの「一九歳以上の人生なし」という短い文章に出会いました。幼くして職業軍人であったお父さんが自動車に轢かれそうになった老人を救って亡くなられ、東京から転居して少年期を過ごされた高崎市外のこの地は、軍国主義一色の時代の中で、まさに狂気としかいいようのない社会であったといえます。そして、結びでは、

「一粒種の形見の私にも、一九歳以後の人生は無い、天皇に捧げよ、潔く死ね」と、本気で母や祖母はいった。親戚中がいった。村人たちもそうだ。教師も学校も。

何故、そうなったのかを、解かねばならないと思いつづけてきた。

この狂気は、少なくとも「自分の頭で考える自由」が奪われたり、その権利を投げ捨てたりした場合、生まれてくるのだと思えてならない。だから、自由に語り合い、考え、ともに生きる仲間がいることが、私の至宝と思うばかりだ。なにより地球上のすべての人びとのいのち、人間の尊さを語り合えるからだ」と述べています。

敗戦によって、一本の羽より軽いと信じられていたのちが、地球より重いという三六〇度の価値観の転換に出会ったことが、柳澤さんのあのほとばしる情熱の源なのだ、と思いました。

四〇年余にわたる出版活動を振り返って、平和と人権と正義の実現に人生をかけた多くの人びととの出会いがなかったら、出版人としての私も社も存在できなかったと、回顧されています。

いま、ウソと隠蔽と改ざんにまみれた安倍首相は、究極の悪巧みを目論んでいます。憲法九条に自衛隊を書き込み、この平和憲法を葬り去ろうと、執念を燃やしています。

この重大な時期に、柳澤さんを失ったことは本当に残念です。

しかし、平和と人権と正義の実現のためにという柳澤さんの魂は、脈々と私たちに受け継がれております。われらの柳さん、長い間、私たちをご指導いただき、誠に有難うございました。旬報社とともに働いた仲間たち一同、深く感謝致します。

▽2018年7月8日の「柳澤明朗さんを偲ぶ会」のスピーチに加筆。

孫からのお礼

おじいちゃまへ

84年の人生、お疲れさまでした。

正直いまだに実感として信じていることができません。いつかは訪れることだと分かっていたはいましたが、こんなにも唐突にこの日が来てしまうなんてと心が追いつきません。

おじいちゃまはとにかく熱い男でした。いつも忙しそうに働いていて、電話をしたり、原稿を読んだり、会議に出たり…。お話をすることも大好きで、いつも輪の中心にその姿がありました。乾杯の音頭を頼まれて、お酒を片手に皆の前でつい熱く語り始める光景は毎度のことで、「あんまり長いと孫に怒られますので…」と私たちを見ては、イタズラっぽく笑うあの楽

しそうな顔が今でも目に浮かびます。

柳澤 清香

おじいちゃまの熱くて大袈裟で真っ直ぐな言葉たちは「おじいちゃまのさやか日記」にも溢れんばかりに詰まっていました。3人の息子の父であったおじいちゃまにとって、初めての孫、初めての女の子であった私の存在は、おじいちゃまの毎日に稲妻を走らせていたみたいですね。私が初めて「じーちゃん」と言ったその日の出来事とその時のおじいちゃまの衝撃と喜びの声が赤裸々に綴られているページを読んで、その大袈裟すぎるような言葉たちに笑ってしまふのと同時に、涙が溢れてきてしまいます。真っ直ぐな言葉のひとつひとつに抱えきれないほどの愛を感じます。照れちゃうね。

はるかかの誕生日に、おじいちゃまがはるかの手を握って涙を流しながら言った「生まれてきてくれてあり



最愛の孫たちと「ぞうれっしゃ」を歌う！

おばあちゃまは私たちの日常の一部だったのだと思

ても驚いているのではないでしょう。いつかは訪れるその日というものは、まだずっとずっと先のことだと思っていました。

がとう」。突然のことで皆少し驚いたけれど、皆が心を打たれた名シーンの瞬間でした。そのあと照れ臭そうにはにかむおじいちゃまの姿に皆で笑ったね。あの年からお誕生日の恒例の言葉になりました。

いつも分厚い辞書を持っている印象のおじいちゃまは、豊かな知識と豊かな表現力を用いて、「言葉」で伝えることを大切にしてきた人なのだと思います。「おじいちゃまは広辞苑みたいな人だね」と昔言ったことを「そうかそうか」と嬉しそうに聞いていたその姿は誇らしげで照れ臭そうでした。最後にホームで会った時も、その話をしていたの覚えていますか？おじいちゃまはあの時と同じように嬉しそうに「そうかそうか」と笑ってくれて、私はその笑顔に泣きそうになりました。

頑固で熱くて曲げることが嫌いなおじいちゃま。私はそんなあなたの血を色濃く受け継いでいます。おじいちゃまの真つ直ぐな思いを形にする表現力、行動力、本当に尊敬しています。大勢の前で演説をするなんて私には壁が高すぎるけれど、おじいちゃまの背中を見て、私も多くの人に想いを届けられるアーティストになり

なりたいと思います。

もっと一緒にお酒飲みたかったね。お酒が好きなのにすぐに真つ赤になって酔っぱらってしまうところもおじいちゃまと同じだよ。

長い人生、今まで本当にお疲れ様でした。そして本当にありがとうございました。

私たち家族を想ってくれてありがとう。溢れんばかりの愛情を注いでくれてありがとう。沢山の大切なことを、私はあなたから学びました。おじいちゃまのことも本当に大好きだよ。安らかにお休みくださいなんて言っても、おじいちゃまのことだから空の上でも背広姿で忙しく動き回っているのかな。足元にはキャンディたちも一緒にいるのかな。

長い間ありがとうございました。これからも私たちを見守っていてください。

おばあちゃまへ

85年の人生、お疲れさまでした。

あまりにも突然のことで、正直気持ち何もかもが追いついていません。きっと、おばあちゃま自身もと

います。最近はなかなか頻繁に会いに行くことは出来なくなってしまうていたけれど、片吹のお家に行けば必ずおばあちゃまがいて、「夕飯は？」なんていつもの会話が。食卓にはご飯やお味噌汁と必ず私の大好きなきゅうりのお漬け物があり、「さやかが来るっていうから、きゅうり漬けておいたんだよ。ちよつとしようばくなつちやつたかしらねえ」なんてやりとりが当たり前のようがありました。よく知っているお味噌汁の味も、ちよつぱり塩気の強いきゅうりも、それぞれ大ききの違うお茶碗も、皆がテーブルを囲んで座った時のあの景色も、何もかもが当たり前の、暖かな日常の光景でした。

おばあちゃまは好奇心旺盛で明るくて強い女性でした。楽しいことを見つけて出すことがとても上手で、いつもハツラツとした、何事も恐れず挑戦する強いパワーの持ち主だと思います。皆で一緒に何かをすることが大好きなおばあちゃまは、いつも輪の中の中心にいて沢山の人達に囲まれていましたね。やっぱ、夫婦揃って同じなんだね。

おばあちゃまに教えてもらった遊びは沢山あるけれど、私たちにとっての1番はやっぱり何と言っても百

人一首でした。もともとかるた遊びが大好きだった私たちは、教えてもらった百人一首に夢中でめり込んでいったよね。夕食後から時に夜遅くまで、おじいちゃまもおばあちゃまも皆で一緒に必死になってかるたの枚数を競っていました。かるたの句を覚えるのに、おばあちゃまが一首一首書きで綴ったお手製の暗記ノートを作ってくれて、私は毎日毎日そのノートを持ち歩いて必死になって暗記したのを、今でもよく覚えています。こんなにも何かに夢中になったあの日々、片吹のお家で、皆でかるたを追いかけているながら笑い転げたあの時間は、私たちにとってとても大切な財産です。もっと、もっと一緒にやりたかった。まだまだおばあちゃまに教えて欲しいことが沢山あったよ。

明るくて、どこでもすぐに歌い出し、無茶振りが多くて、「そうよ」と返される不思議な会話を周りを戸惑わせたり、お茶目な表情で皆を和ませたり、時には誰も動かせないほどの頑固さを発揮したり。そんなおばあちゃまが大好きだよ。溢れんばかりの思い出のひとつひとつが、大切な、大切な宝物です。眩しいほどの笑顔で沢山の人たちに囲まれている、そんなおばあちゃまが目に見えます。

以前一緒に旅行した沖縄の海のような、綺麗な青色のイヤリングをプレゼントしたよね。見つけた時におばあちゃまにぴったりだと思って嬉しくて、とても綺麗だから私も揃いでつけようと同じものを買いしました。つい2ヶ月ほど前のことで、おばあちゃまはとも喜んでくれて、本当に沖縄の美しい海のような爽やかな青色だから、これは夏にぴったりだと言って2人で夏にお揃いでつけようねと約束したのを覚えていますか？あの約束から、まだ、夏を迎えていないよ。私はまだ1度も、あのイヤリングをつけていないよ。一緒にお揃いでつけることはできなかったけれど、どうか天国でつけてくださいね。そして、さやかとお揃いなんだよと、おじいちゃまに自慢してね。

長い人生、今まで本当にお疲れ様でした。そして、本当にありがとうございました。私たち家族を想ってくれてありがとう。支えてくれてありがとう。きつと今は、おじいちゃまの隣にいるのかな。天国でも、いつまでも仲良しで微笑ましくて賑やかな夫婦でいてね。長い間本当にありがとうございました。おじいちゃまと一緒に、これからも私たちを見守っていてください。

▽2018年7月8日の「柳澤明朗さんを偲ぶ会」のスピーチより。

子どもたちに「平和を！」の人生

横田 静

(神奈川ぞうれっしゃネットワーク)

柳澤さんとの出会いは、正に合唱構成「ぞうれっしゃがやってきた」の取り組みの中でした。労働旬報社の社長さんなどとはつゆ知らず、きちんとした背広姿とは不自然なほど、大きな声で顔中口みたいに歌っておられた姿がすごく印象的で魅かれました。

その姿はその後変わることなく、ずっと続いています。それからというもの、神奈川県の中で演奏していない市はないというほど広がった「ぞうれっしゃがやってきた」ですが、常に柳澤さんの大風呂敷を受けて実現したものです。神奈川ぞうれっしゃネットワークの結成から、子どもたちの「第九」といわれるほど、現在も全国どこかで毎年歌われ続けています。

戦後広がった「うたごえ運動」の中でも特筆されるものです。

神奈川でのエピソードも強烈です。1992年の横

浜アリーナでの2300名で歌ったとき、鎌倉芸術館のときなど、私は幾度かの大きな失敗してその度に「切腹だ！」と叱られ、でも最後までホローして下さいました。

ご自身が軍人教育を受けたことを最後まで悔い、子どもたちに「平和を！」の人生を貫かれたことを、心から尊敬しお礼を申し上げます

灯のこころを大切に

平野 好英

(合唱団この灯 団長)

私たち「合唱団この灯」は2019年で創立28年になります。柳澤さんとの出会いは、実は「どうれっしやがやってきた」を一緒に歌っていたときでした。そして1990年8月、上野東照宮境内に「ヒロシマ原爆の灯」が灯されました。

この火は、福岡県星野村の元軍人山本達雄さんが広島
島の被災地から、叔父さんを焼き殺した形見の火、恨
みの火として持ち帰り、23年間こっそりと灯し続けて
きたものです。上野にこの火が灯されたのを機に、こ
の火のことを歌にしようと、現在合唱団顧問の堀喜美
代先生と共に、星野村に出かけ山本達雄さんの思いを
こと細かに取材したものでした。その翌年にカンター
タ「この灯を永遠に」が創られ、これを歌う合唱団と
して歌い続けています。

この「ヒロシマ原爆の火」のことで、原爆が落とさ

れてから1カ月後に、焼け跡にくすぶっていた残り火
を見つけ持ち帰ったことについて、「本当に火が燃えて
いたのか」とか、「恨みの火から平和の灯に変わったの
は何があったのか」など、率直な疑問があり、直接山
本達雄さんから聞き出すしかなかったのです。

そこでジャーナリストとしての柳澤さんの本領発揮
です。とことん事実を明らかにしようとするその執拗
さに、山本さんも怒り出すこともあったとか。

しかし、その熱心さは「どうれっしやがやってきた」
運動に対する熱い思いと同じように、平和と人の命の
尊厳が大切にされる社会に向かって歩み続ける姿その
ものでした。

そして合唱団の一員として、時にレッスンの中で「芸
大出の私としてはだなあ…」と笑いを誘いつつ、「悲
しみや恨みは消えることはないが、報復、戦争や暴力

を使うでない、それでは解決できない。悲しみや報復
が繰り返されるだけだ」と山本達雄さんの言葉を伝え
ながら、物事は平和的に話し合いで解決することが大
事であることを話されました。私たちの合唱団が、命
の尊厳と平和の大切さを基本に運動を進めています
が、山本達雄さんの火に対する思いを『灯のこころ』
と表現したのは柳澤さんです。

2017年に核兵器禁止条約が国連で採択され、米
朝首脳会議もおこなわれて、武力や戦争でなく話し合
いで平和的に解決する世界の流れになってきているこ
とに、柳澤さんの微笑んでいる姿が目に見えます。
その笑顔を曇らせないように、私たちはがんばってい
きます。見守ってください。

柳澤さんの思い出

加茂 和子

柳澤さんと最初に会ったのは、中央労働学院が港区の古川橋近くにあった1978年である。私は6年間勤めていた保育園をやめ、新橋の文房具店で夕方までアルバイトをし、その足で学校に通っていた。学校には文芸科があり、一年制であったが2年間勉強した。

文芸科の授業の中に「ルポ」についての講座があり、ルポライター・ジュ作家の故崎崎曉巳さんと一緒に柳澤さんも講師をされていた。

そのルポ講座の授業で、その年の秋に沖電気を指名解雇された争議団をルポすることになった。争議団の事務所は学校の近くにあり指名解雇された人も「ルポ」講座に出席していた。「ルポ」講座の受講生の中から、これからもルポの勉強を続けたいと思った人たちが「現代ルポライター・ジュ研究会」をつくり、柳澤さんと今崎さんに顧問になってもらい、月1回の勉強会がはじ

まった。もう40年も前のことである。

労働旬報社の名前は村山ひでさんの『明けない夜はない』や須長茂夫さんの『どぶ川学級』を読んでいたのを知っていたが、その出版社の社長が柳澤さんであることはその時、知った。

私の夫も規模はまったく違うが、出版社の編集者であったので、「若者の本離れで『出版不況』だ」という話を日々、聞いていたので、同業種の出版社の社長はいへんだろうな」といつも思っていた。

ルポ研では『たたかいのルポライター・ジュ』というサークル誌を最初は年1回発行していた。学校の夏休み中、一人で沖縄に行った時のことを書いたのが、ルポを書く初めであり、印刷物になり、人に読まれた初めての経験であった。今ほど基地問題についても問題意識もたず、単に観光をして帰ってから、沖縄の県人

会の集まりに参加させてもらうことがあった。まだ沖縄復帰から6年目で、県人会の人の中には「パスポートを持って本土に来た」「ドルを使っていた」「家を借りるときに差別があった」等々をつい最近の出来事として話してくれた。ルポというより、その時の感想のような文章であった。

その後、『たたかいのルポライター・ジュ』には、「先物取引の被害者」の話や社会問題になっていた「サラ金」について、「葉害エイズ」について書かせてもらった。月1回のルポ研の例会も、子育てを優先して欠席しがちな時期もあった。

子どもが小学校入学のころから、またルポ研の例会に出席するようになり、前から柳澤さんが力を入れていた「ぞう列車」の合唱に誘われ息子と参加するようになった。1995年1月17発生した阪神淡路大震災のあった夏に神戸で行われた「ぞう列車」の合唱に親子で参加したことも柳澤さんとの思い出の一つである。ルポ研の集まりで、熱く「ぞう列車」の話をされていた姿を今でも思い出す。

ルポ研の仲間が多方面で活躍し、本を出される中、作品を書けずにいたいた時も、年賀状等で「書く力があるんだから書くように」と励ましつづけてくれたこ

ともとても力になった。

もう8年前になるが「介護保険10年と母の介護」という今は亡き両親のことを書く機会を与えられたことは、私の宝の一つとなっている。

例会のたびに私たちに話してくれる内容の準備をし、仕事を退職してからは遠方にもかかわらずほとんど例会にも参加してくれていたことに本当に感謝している。

柳澤さんから聞いたむずかしい話（経済や政治）は具体的には覚えていないが、「軍国少年」だった時のこと、「時代を読む力（目）」を持つよう」言われたことは今でも私の心にきざまれている。

ハンセン国賠訴訟や今も続けている「水俣病」についてもあの時、柳澤さんから「時代を見るアンテナを大事にするよう」と言われたことが、私の生きる指針になっている。

ルポ研に対して、長い間情熱をもってかわってくださったことに、あらためて感謝したい。

（現代ルポライター・ジュ研究会会員）



早大大学院・野村ゼミ旭川同窓会で——後列右から2人目が柳澤さん。
前列左側が川崎さん。

◇『回想の川崎忠文』（早稲田大学労働法大学院同期生、元労働旬報社編集部、前中央大学講師）所収、2011年11月25日、自主出版）

この追悼集は、芹澤寿良さん（高知短期大学名誉教授）、佐方信一さん（元労働旬報社編集者・校正者）、石井次雄さん（元旬報社社長）が、広島縁の方たちと相談して、出版した。

作った経過は、同書の「刊行にあたって」で芹澤寿良さんが書かれているが、芹澤先生と佐方さんは、「法政大学大原社会問題研究所の研究会・所報誌編集、単行本編集」などで日常的な交流があり、石井さんも含め何回かの旅行に一緒に行っていたことから、追悼集が企画されたようだ。

『回想の川崎（川崎）忠文』を出版する——PDF版。たまたま私も三人の方の都内での飲み会に参加して、なにか手助けできないかと佐方さんに相談して、DTP・版下編集作業を行った（同時に「川崎教授の教養ゼミ一期生」という短文を書かせていただいた）。

<http://okina1.cocolog-nifty.com/blog/2011/11/post-26a3.html>

「柳さん」が書き残したメッセージ

飯島 信吾

生前最後の文章

柳澤さんをみんなは「社長」と呼んでいるが、私は「柳さん」と話すことが多かった。旬報社内では、みんなそうだったのではないかと思う。

故人になってしまったが、この愛称で文章を書いておきたい。

「現代ルポルタージュ研究会」の顧問だった今崎暁巳さんへの思い出（2010年12月15日没）は、本誌前号（2011年3月）に、熱情をもつて、「ごいっしょに人生をつくっていきましょう……君の声がたしかに聞こえるよ」を書いている。

その今崎さんより1年早く物故したのが川崎忠文さ

ん（2009年12月14日に東京都青梅市の自宅で死去で、柳さんにとっては、早稲田大学大学院労働法の時代からの親友で、かけがえない労働旬報社の同僚だった）。

その生前最後の文章は、あまり知られていないが、「人間の尊厳」の実現に人生をかけた川崎君への讃歌」（『回想の川崎忠文』「早稲田大学労働法大学院同期生、元労働旬報社編集部、前中央大学講師」所収、2011年11月25日、自主出版）だった。

同文章の導入部では、50余年の付き合いがあったことから書き始めている。

「野村先生の初めての授業の日、研究室に呼ばれて紹介されたのが彼との出会い。以後、五〇余年、仕事も人生も二人三脚で歩む友の誕生だった。それは生涯変わらぬにあつたのだが、思わずひきこまれてしまう人

なつっこい少年のような笑顔で握手してきたことが忘れられない」と書き、「私たちの学んだ当時の早大大学院は野村早大教授、沼田都立大教授、松岡明大教授の労働法学会の三巨頭が教授陣、島田助教授以下に佐藤、中山、初井、竹下先生などの高弟が綺羅星のごとく並ぶのだが、この先生方が私と川崎君の生涯の仕事となる労働旬報社の中心的執筆陣となっていたくことになるわけ」と綴っている。

柳さんにとっては悲しい事態が続いたが、ある日、突然電話があり、『追悼集』と追悼の事務局をやってほしい』と頼まれた私は、ほぼその間、3日をおかずにメールや電話で話すようになった。

私が旬報社の席がなくなったのは、「社長としての柳澤さんの定年の日前後」だったので、多分、日常的に連絡を取り合うのは、17年ぶりのはずだ。

しかしお酒を飲んでいるとき、「自分はアルツハイマーの薬を飲んでいて、新薬が出て効いている」と話してくれた。「そうですか、大丈夫ですよ」と「医療生協の雑誌・新聞編集者の経験」などもよく話したことがあった。

状況を克服していく過程で、川崎さんは退職していく。

当時、30代だった柳さんにとつても（退社した多くの社員はもちろん）、一生で忘れられない困難だったのだな、と思った。

最後に託されたこと

2011年から12年初頭は、今崎さんの件（追悼集と偲ぶ会開催）を中心に、ほぼ1年間、日常的な交流があったが、川崎さんの原稿を仕上げる間、「まだやりきれていないことがあるんだ」と電話がたびたびかかってきた。

柳さんは、「時代をどう読み解くか、国家と時代の変容を読み解く、支配と企業社会の変容を読み解く、教育は今、何が問題か」という話だった。

「参加者は、教育学者のAさん、子育て文化協同研究会のBさんなどを中心にやりたい」と、具体的に提案してきた。

そのやりとりの間、まずは「柳澤明朗のページ」を創りますから、そこで発表できるようにしましょう、と作成したのが、次のページだ。

柳澤明朗のページ——次の世代に伝えたい。（UP

そして今崎さんの偲ぶ会（追悼の会開催・2011年6月4日（土））が終わったあと、川崎さんの追悼集にかかっていくのだが、2011年10月ごろ原稿が上がってきてびっくりするほど事実誤認が重なった文集だったので、石井さん（元旬報社社長）に相談して、訂正してもらった（病は進行していた）。しかし、歴史的・企画的背景を思い出す自己回復力の強さには、びっくりするほどだった。

その文章の中で、今でも確認できない事実は、「世田谷での松村一人先生（哲学者）の交流」を書いていて——「実践論・矛盾論」の訳者の松村一人先生と大学の仲間で研究会を開いた——、これは若き柳さんのことではないかと、今でも確認したらよかった、と思っている。確か、私は聞いたことがあったので。

その最後の文章は、1970年代初頭の「和議状況」（倒産・新社ではなく）を振り返って——最後に、会社が経営困難になったとき、「労旬の灯を消すな」と株主や多くの執筆陣の先生、読者、業者の皆さんの協力体制をつくる最先端にたつて、社の継続・発展への道をきりひらいていったときの川崎君の取り組みに、心からのお礼を述べておきたい——と文章を止めている（この

2012年5月22日）

<http://e-kyodo.sakurane.jp/yanagisawa/yanagisawa-index.htm>

ホームページづくりの進行中に残念ながら、「グループホーム」に入ったので、自ら確認できる状況ではなかった。

その後、「ルポ研の16号」（本誌）の編集委員会で、会員の小川緑さんから2つ目のコピー（一つは先にHPにUPした「熱闘!! 現代ルポルタージュ論の進化のために」を見せてもらったら、なんと柳さんは「現代ルポルタージュ研究会」で2003年5月24日から2004年8月28日にかけて、14回にわたって、「現代史を問う勉強会」を開いていることを知った。

そのテーマは「歴史講座」だが、第1回（2003・5・24）の「こんにちには！——にんげん——人間が人間として生きる権利——人権のルーツ——近代市民革命探検の探検を一緒に。——肥大化しきった疎外に對して人間回復をしていく協同・共生の可能性を求めて。

等身大に学び、解き明かす近現代・未来——現代の

◇柳澤明朗さんの歴史講座

第1回(2003.5.24) こんにちは! ——“にんげん”——人間が人間として生きる権利=人権のルーツ・近代市民革命探検の探検を一緒に。——肥大化しきった疎外に対して人間回復をしていく協同・共生の可能性を求めて

等身大に学び、解き明かす近現代・未来——現代の疎外の状態、原因と、質を解き、人間回復をしていくための協同、コミュニティの可能性を追究するために

第2回(2003.6.28) 近代3つめの89年——1889年明治憲法体制の意味・機能

第3回(2003.7.26) “歴史上初めて”の第一次世界大戦と戦後世界体制

第4回(2003.8.00) ファシズムへの道とその運命——誕生と克服していく人類の英知

第5回(2003.9.20) ファシズムのしくみ・体制(その1)

第6回(2003.10.25) 大東亜共栄圏の思想 ファシズムのしくみ・体制(その2)

第7回(2003.11.22) 戦争と侵略の天皇制ファシズム国家

第8回(2003.12.20) 第二次世界大戦——原因・正体、口実、事実、基礎データ
主な憲法改正案年表・有事体制関連年表

第9回(2004.1.24) 第二次世界大戦 基本的性格——原因・正体、口実、事実、基礎データ

第10回(2004.2.28) 敗戦——解放期に立てられた世界・日本の国家形成の基本的性格

第11回(2004.3.27) 第二次世界大戦後の世界秩序=冷戦の45年——どのような秩序か。なぜ、どのようにして体制はつくられ、なぜ崩壊していくのか。日本はどうからむ? 世界史・日本のポイントとなる事件を追って。

最終回(2004.5.22)

診断書——7つの大病に冒された現代社会——資本主義社会の賞味期限切れの証——病原は自身の体内から発生。なぜ、どのようにして。どう解決するか処方箋——病原を除き、資本主義社会をどう乗り越えるのか。どんな未来社会が描けるのか。そのキーはなにか。

《追加》 憲法・教育基本法体制とは? その価値・意義。なぜ、どのようにして——人類が獲得した 21世紀づくりの指針

第1回(2004.6.26) 憲法・教育基本法体制の歴史的大転換の状況、本質、争点
なぜ、なにを対抗軸とした対決か。

第2回(2004.8.28) 憲法・教基法体制破壊の論理と予定される人間像・社会像——「公」による個の否定。なぜ、どこにむかって統合するのか。震源地はどこか。——軍事大国、グローバルメガコンペティションに勝ち抜く担い手づくり。人格、人権の空洞化のマインドコントロールを通して愛国、公・国際協調、人的支援に統合。

疎外の状態、原因と、質を解き、人間回復をしていくための協同、コミュニティの可能性を追究するために

そして「講座」の追加では、「憲法・教育基本法体制とは? その価値・意義。なぜ、どのようにして——人類が獲得した 21世紀づくりの指針。」

第1回(2004.6.26) ——憲法・教育基本法体制の歴史的大転換の状況、本質、争点
なぜ、なにを対抗軸とした対決か。

第2回(2004.8.28) ——憲法・教基法体制破壊の論理と予定される人間・社会像。

——「公」による個の否定。なぜ、どこにむかって統合するのか。震源地はどこか。

——軍事大国、グローバル・メガコンペティションに勝ち抜く担い手づくり。

人格、人権の空洞化のマインドコントロールを通して愛国、公・国際協調、人的支援に統合。

「現代社会をとらえる視覚の追究」は7年以上前から、考えていたテーマであることが分かった。いやもともと若い時代から「編集者として、社会運動家として」

生きてきたテーマではないか。

しかし出版社の社長としては「売れる本づくり」と声を大きくしていた(私は後輩編集者だったので厳しく言われた)ので、なかなかやりきれなかったのではないかと、今は思う。

しかし時間は少ないが、私たちも真摯に受け止めていかなければ、申し訳ないと書き連ねたしだい。

(元労働旬報社編集部)

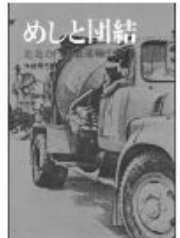
▽左の講座は、「柳澤明朗のページ」で全文、PDFで読めます。

<http://e-kyodo.sakura.ne.jp/yanagisawa/yanagisawa-index.htm>

◇柳澤明朗さんの主な編集・企画した出版物（順不同）

『どぶ川学級』 (須永茂夫著、1969年) 	『未来を語り続けて』 (広島県原爆被爆教師の会、1969年) 	『運動のなかの労働法』(沼田稲次郎著、1962年) 	『若者いろの涙あふれて』 (柳澤明朗著、1994年) 	『今崎暁巳さんと私』 (2011年) 	『回想の川崎忠文』 (2011年) 
『新・学力への挑戦』 (仲本正夫著、2005年) 	『労働の人間化とディーセントワーク』 (牛久保秀樹著、2007年) 	『いま、なぜメディアを読み解く目の』(仲筑間卓蔵著、2008年) 	『松川15年』 (松川事件対策協議会、1964年) 	『教育は死なず』 (若林繁太著、1978年) 	『松下王国の神話』 (橋本・中山著、1978年) 
『いのちの讃歌』 (今崎暁巳著、1970年12月) 	『いのち萌え』 (今崎暁巳著、1979年5月) 	『この人生に愛なくば』 (今崎暁巳著、1981年6月) 	『石流れこの葉沈む日々』 (高野不当解雇撤回対策委、1977年) 	『教育黒書』 (野村・宗縁・宮之原編、1968年) 	『三菱帝国の神話』 (今崎暁巳著、1977年) 

◇柳澤明朗さんの主な編集・企画した出版物（順不同）

『なにをみつめて翔ぶのか』 (今崎曉巳著、1980年3月) 	『どぶ川学級』 (今崎曉巳著、1982年9月) 	『どぶ川学級』 (今崎曉巳著、1984年) 	『コブだらけの勝利』 (今崎曉巳著、1969年7月) 	『めしと団結』 (今崎曉巳著、1970年6月) 	『故郷は緑なりき』 (今崎曉巳著、1982年2月) 
『暮らしと女と街づくり』 (今崎曉巳著、1985年12月) 	『暮らしのルネッサンス』 (今崎曉巳著、1984年5月) 	『生活ごいっしょに』 (今崎曉巳著、1990年3月) 	『良心の歴史をつくりたい』 (1970年6月) 	『700人の記録』 (1971年) 	『早く高く勝利を』 (1976年3月) 
『明けない夜はない』 (村山ひで著、1969年) 	『若者はいま歩みはじめる』 (今崎曉巳著、1978年) 	『人間・金子満広』 (今崎曉巳、1993年) 	『友よ未来をうたえ』 (今崎曉巳著、1975年9月) 	続 友よ未来をうたえ (今崎曉巳著、1977年11月) 	『新世界へ』 (今崎曉巳著、1984年6月) 

たたかいの ルポルタージュ 第16号

2019年4月1日 初版発行

頒 価 500円(税込み)

編 者 現代ルポルタージュ研究会

〒170-0002

東京都豊島区巢鴨5-48-5

上田方 ☎03-3918-5519

DTP インターネット事業団

印刷所 (株)双信舎印刷
